

随 想

中高の授業研究会と英語教育

愛知淑徳高等学校英語科教諭

谷口宜邦



1978年度の数学科から始められた愛知淑徳中学研

修会は、県内私学と千種区・名東区の小中学校に参加を呼びかけて行なわれた中学校の授業研究会でした。翌79年度の第2回目が英語科の担当でした。78年に英語科教諭として採用された私は、高校に在籍していたのでこの研修会の周辺をうろろろしていたに過ぎないのですが、就職した春に完成した語学センターでの授業にも大いに期待し、中学英語科の新し

い取り組みに感心しながら見入っていました。

研修会のパンフレットとして「現代の英語教育―淑徳中学の英語―」とタイトルが付けられた、語学センターと中学英語科とで共同編集された38頁のA5版の冊子が作られました。前年の数学科で作られたものに続くものでした。そこには学習指導要領の移り変わり、淑徳中学における英語指導、語学センター紹介などに加え「英語をなぜ教えるのか」という、

よくまとまった論考がのつています。平泉渉氏と渡辺昇一氏による「英語教育大論争」や中津僚子氏の「何で英語やるの」などをあげながら、英語の「実用論」と「教養論」とが混乱し無用な論争になっているとして冷静な「学校での英語教育」を語っています。

今これを読んで改めて中学高校での英語教育の方向をしつかり考えなければならぬと反省させられるのは、生徒に英語力をつけるということととも

に、英語という窓を通して社会や文化を教える教師の発想と工夫が必要であることです。単に新しい「読み書きそろばん」的発想で英語を教えるのではなく、教材をよく吟味し、教授法を研究して本当の実用的な教養を身につけさせることができるでしょう。

現在は外部に公開する研究会は行なわれていませんが、校内の公開研究授業は中学・高校で継続して行なわれ、今年度は国語科が担当をしました。